東北学院大学博物館　企画展図録

KOREMITE vol.10

南津島の田植踊を一〇〇〇倍楽しむガイドブック

目次

みんなの鑑賞ガイド〈場面解説〉

初めて田植踊を見るあなたに！

種まき（種下ろし）……2ページ
田植え（寄り返し）……6ページ
稲刈り……8ページ
稲こき……10ページ
籾すり（磨臼）……12ページ
上がり（唐箕ふき）……14ページ
神楽・岡崎……16ページ

もっと田植踊！〈トピック解説〉

田植踊を深く知りたいあなたに！

配役と衣装……18ページ
楽器と用具……21ページ
東北地方と田植踊……24ページ
山口弥一郎ノート……26ページ
神楽七芸……28ページ
震災後の取り組み……30ページ
参考文献……32ページ

南津島の田植踊ってナニ？

「津島の田植踊」は福島県重要無形民俗文化財、国の選択無形民俗文化財に指定される貴重な芸能です。福島県浪江町津島地区の四集落に伝承されてきました。このガイドブックでは、そのうち**南津島の田植踊**について、解説していきます！

何を演じているの？

田植踊は稲作の場面を再現し、豊作を願う踊りです。①種まき→②田植え→③稲刈り→④稲こき→⑤籾（もみ）すり→⑥上がりと続きます。演目を理解するために、私たちが特別に**《イメージ》《歌詞》《見どころ》**の三つを紹介していきます！

①種まき（種下ろし）

注目ポイント：太夫（たゆう）・笛　田植踊の始まりをつげる

《太夫の口上》

東西東西（とざいとうざい）、東西東西とは、ちと高（たこ）うございますが、
これより（場所：何々様宅・何々会場・イベント）にて、
（目的：厄流し・新築・結婚などの慶事）を祝し、
南津島郷土芸術保存会、（芸能：田植踊・神楽の舞）
相つとめます
まずはそのため口上、ハッ左様

演目のイメージ：踊を招いた家を褒めに褒める！

リーダーである鍬頭が、早乙女やささら（苗ぶち）たちに
「田植えをするように」とかけ声をかける口上から、種まきはスタート！
種下ろしは「（踊を招いた家の）旦那さまはお金持ち！　建物はゴージャス！
蔵にも米俵がたんまり！」　そんな〝素晴らしい家〟だと**褒める歌**をうたうよ！

《鍬頭の口上》

ヤーレヤレ、これの御旦那（おだんな）さまは、御家（おうち）にござりましたか、あきの方（ほう）から御田植が
千人も万人もばっかり、もれり、もれりなどと参じました。まず水案配（みずあんばい）でも見てやり
ましょう。これなる水口（みなくち）が少し高い、ストトントンと踏み下げて、まず水案配もでき
申した、**植えて給（たも）れ**申さ早乙女（さおとめ）たち、ホーイ

①種まき（種下ろし）

当春の初めに　御苗取が御座った
御旦那様を見申せば　御金箱に手をかけて　御勘定で御座った
御座敷を見申せば　備後表に高麗縁を　敷き詰めに敷かせて
唐紙障子もたうたり
御蔵前を見申せば　千俵の俵も万俵の俵も　切り目ちゃんと積ませて
御田地を見申せば　中の町のよいところ　御苗代と召されて
種まきの上手は　かどがわきの才三郎
黄金の笊を持たせて　左さ向いてもよんざらりん　右さ向いてもよんざらりん

注目ポイント：種下ろし　かつては一時間半歌い倒した

現在は二〇分ほどで演技しますが、かつては一時間半もかかりました。歌は驚異的な長さです！　現在と昔の出だしを比べてみると…

当春の初めに　御苗取が御座った
どうちの方からござった　あきの方からござあった　あきの方はどの方じゃ　あきの方はこの方じゃ
何人ばかりござった　千人ばかりござった　ごしょうぞくは何々　かくれみのにかくれがさ　御手に持ち
は何々　延命の金袋　うちでのこづち　御宝持ってござった　これも一つ見事じゃ
御門前を見申せば　唐木造のご門で　上り龍に下り龍　からたけに唐松　梅のぼっくにうぐひす　左
甚吾のほりもの　これも一つ見事じゃ　御門松を見申せば　西山のほん松　東山のひめ松　おんかと松と
召されて　召されての其の後　鬼うち木を見申せば　せどのさわの梅木　左さっぱ三さっぱ　右さっぱ三
さっぱ　鬼打木と召されて　召されてその後　七五三のしめ縄　にんぎにんぎとかけられ　御門番にはだ
れだれ　千太郎に万太郎　御門番を召されて　召されてのその後　御台所を見申せば　めがまおがまな
ながま　きらずうすが百から　男女が千人たちに
御旦那様を見申せば　御金箱に手をかけて…

小さな文字は、現在は歌っていないよ

② 田植え（寄り返し）

演目のイメージ：田植えを再現した細やかな動作

「素晴らしい苗ができた、さあ植えて下さい！」という口上から田植えに入るよ！

よんざんざらりんと蒔いたる種は、三日という時水切って、七日という時水張って、
十七・二十日になるならば、菖蒲苗にもなり申した、**植えて給れ**申さ早乙女たち

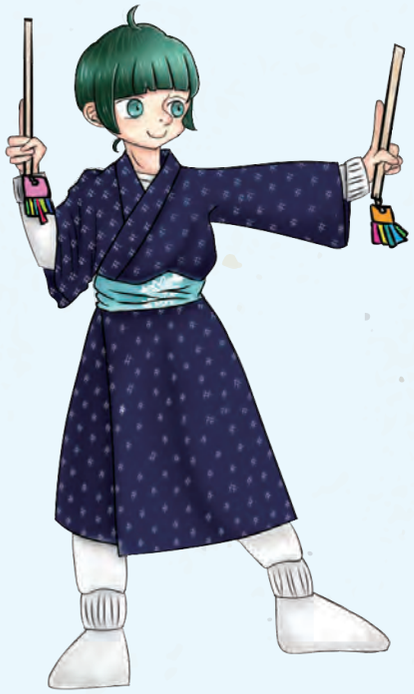
演者の息を揃えるシンナオが入る

十四せじの　おかたよさに　サアサア　なよばよなにとからくる　ソーリヤ
なよばよなにとからくる
ななみの倉の前の　サアサア　あせみが柴が焚きもの　ソーリヤ
あせみが柴が焚きもの

注目ポイント：太鼓　鏡太鼓の美しさ

注目ポイント：ささら（苗ぶち）　苗とりをする子どもたち

子どもたちが踊るささらは、
田植踊への入り口



青年たちは涼し気な顔で、
重い太鼓を鏡のように持ち続ける

③稲刈り

演目のイメージ：実った稲を収穫する

「素晴らしい稲が出来たぞ！さあ刈って下さい！」という口上から稲刈りに！

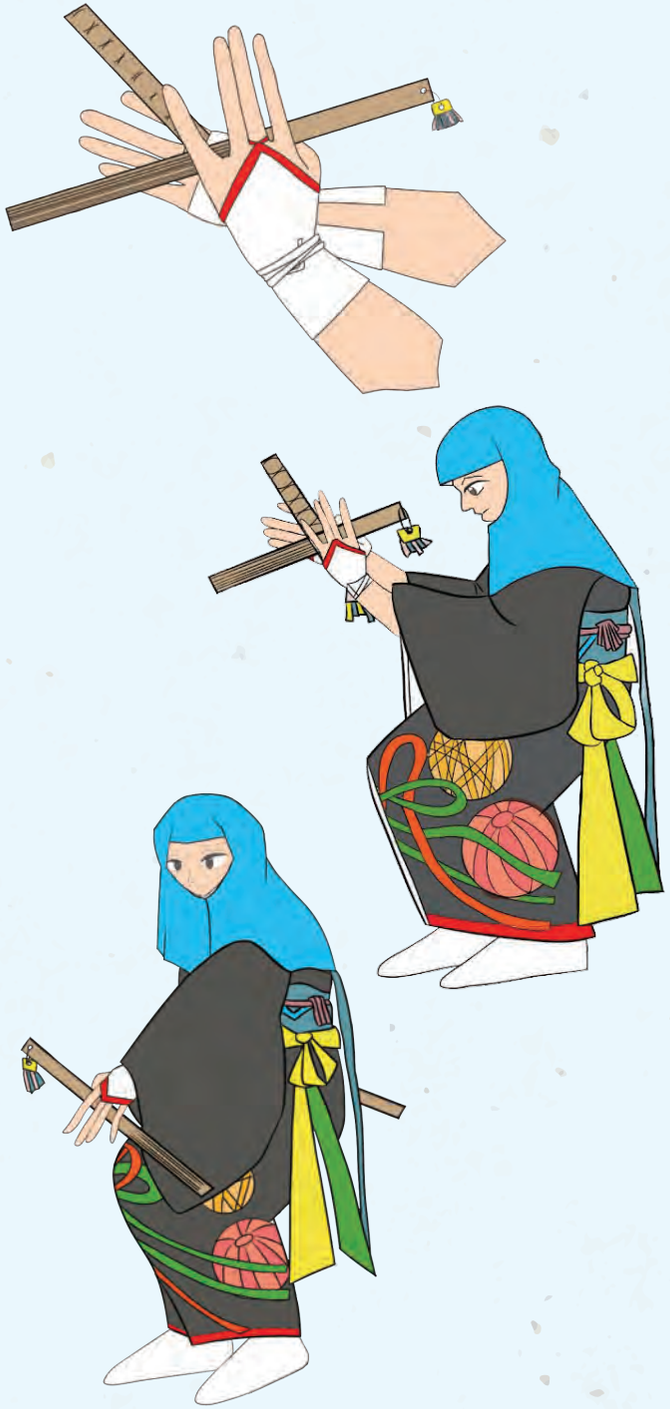
上六十日、下八十日という時は、前田の早生もそよみいて、上畔・下畔枕にして
いた申さ、鎌に鎌を引っさげて、**おっ刈り散らして給れ**申さ早乙女達

なよとさ　ささ夕暮れに　ささい出てな見れば　前田の早生もそよめく　ソーリヤ
なよとさ　ささ百三十さ　ささ三人の中で　左の鎌は　是のむこどの

演者の息を揃えるシンナオが入る

注目ポイント：早乙女の妙技①

稲を**鎌で刈る動作**を、ささらを使って表現するよ！



④稲こき

演目のイメージ：刈って干した稲を脱穀する

「稲刈りご苦労様でした、つぎは脱穀して下さい！」という、口上から稲こきに！

御苦労の上の御苦労では御座れども、刈ったばかりでは置かれ申すまい、千歯（せんば）に千歯をおっ立って、**おっこき散（ち）らして**給れ申さ早乙女達

演者の息を揃えるシンナオが入る

今年ゃ世の中（ナァイ）穂に穂が下がる　なんちゅういえ
早生で八石（はちこく）（ナァイ）中生（なかて）で九石（きゅうこく）　なんちゅうえ
まして晩生（おくて）は（ナァイ）やれ箕（み）で計（はか）る　なんちゅうえ

注目ポイント：早乙女の妙技②

稲から**穂をとる動作**をささらで表現するよ！
その動作は稲束を千歯こきで脱穀する場面を表している！

⑤ 籾すり（磨臼）

演目のイメージ：籾を脱穀し玄米にする

「脱穀ご苦労様でした、つぎは籾をとって下さい！」という口上から籾すりに！

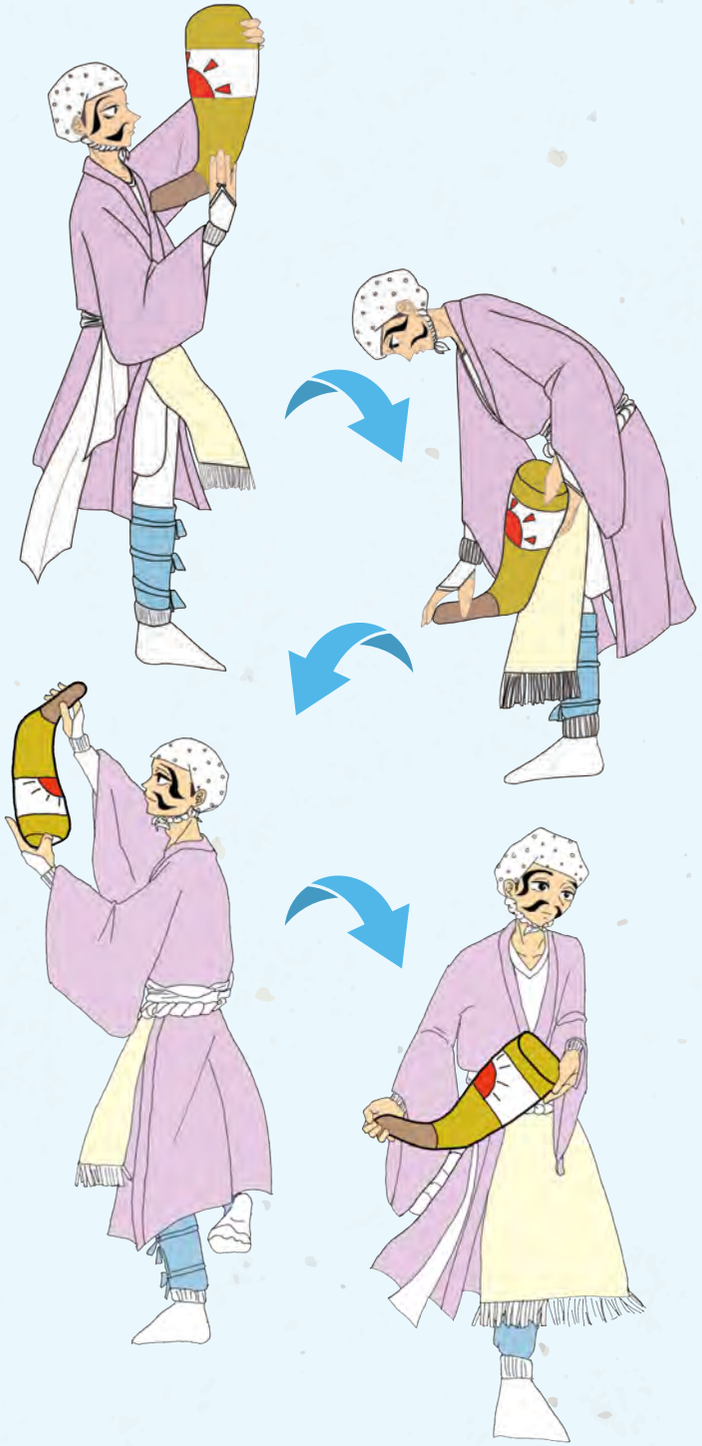
御苦労の上の御苦労では御座れども、扱いたばかりでは置かれ申すまい、木磨臼・土磨臼おっ立って、**おっぴき散らして給れ**申さ早乙女達

演者の息を揃えるシンナオが入る

あつき平の天明坂は　踏まば平らになれかし　ハーサッサッサ
松風を耳にそわんで　越え来る小風が耳にそむ　ハーサッサッサ
耳にそわばののこ見せて　夏の衣装の帷子　ハーサッサッサ

注目ポイント：鍬頭の見せ場

これまでとは違う、ふくべ捌きを見てね！



⑥上がり／上がりはか（唐箕ふき）

演目のイメージ：籾がら飛ばす／田の神様を送る

「籾すりご苦労様でした。つぎは籾がらを飛ばして下さい！」という口上から、田の神を送るあがりが始まるよ！

御苦労の上の御苦労では御座れども、ひいたばかりでは置かれ申すまい、唐箕におほみをおっ立って、**おっぷき散らして給れ**申さ早乙女達

演者の息を揃えるシンナオが入る

鎌倉の ヨイト 上るな道に ソーリャ 椿な植えて育てて ソーリャ

あの山で ヨイト 蝉がな鳴かば ソーリャ お上がりやれや田の神 ソーリャ

注目ポイント：鍬頭・太鼓／だんだん少なくなる踊り手

ひとり、またひとりと踊り手たちが去っていく…

取り残される鍬頭…

《鍬頭の口上》

さあさあ大変だ、こんな広い耕土におれ一人残された。狐にでも化かされないうちに、五穀成就でもひっこくって、引っ込みましょう。

五穀…出が悪い、左の足から踏み出して、五穀成就と納まるところ、

五穀成就と納まるところ、五穀成就と納まるところは、民や万世めでたかりけり

私が振り返ったところで、拍手をすると〝通〟ですよ！

神楽・岡崎

演目のイメージ：邪気を払う、幸運をもたらす舞！

神楽舞（長獅子）・岡崎（ひょっとこ）の演目は、田植踊と合わせて演じられてきたよ。ただ公演では、「田植踊」か「神楽」のどちらかだけになることもあるので、両方見られたあなたは幸運！　神楽には邪気を払う意味があるよ！

注目ポイント：生きているかのような獅子の姿

神楽（長獅子）は、四方を清める四方固（しほうがた）め、→幣束（へいそく）をいただいて舞う幣舞（へいまい）、→鈴をいただいて舞う鈴舞、→そして荒々しく舞う乱舞（らんまい）と進んでいくよ！生き生きとした獅子の姿に注目！

注目ポイント：岡崎　獅子にいたずらするひょうきん者

岡崎（ひょっとこ）は、獅子にいたずらをするひょうきん者。あの手この手で、獅子にいたずらをしてみようとするよ！どこから登場するか、どのようないたずらをするか、いたずらの結果どうなってしまうのか、見どころばかり！

獅子頭

岡崎の面

獅子にかじられる観客

配役と衣装

太夫：踊りの最初と最後のけじめをつける**拍子取り**で、太鼓を打ちならします。津島の他の三地区には見られない、南津島だけの役。紋付の着物と羽織を着用し、頭に豆絞りでほおかぶりをして演じます。

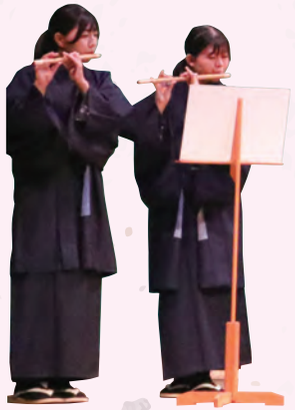
鍬頭：「ふくべ」を頭上で振り回しつつ、**踊り全体の音頭をとる役**。顔に白粉を塗り小さく頬紅をつけ、墨で大きな眉と髭を描いて踊ります。白股引に花模様の長襦袢、「豊年」と書いた緞子を締めます。厚化粧に滑稽な服装で、まるで道化のような姿です。

もっと田植踊！

早乙女：鍬頭の指揮のもとに**農作業を行なう役**。もともとは女装の青年五人で踊りました。農作業を表現した動作が多くあります。花嫁衣装である黒留袖を裾高に着て、広幅帯の端を2つに折って後ろに垂らすという、特徴ある着付けです。左腰に二色のしごきを下げ、空色の「おこそ」を頭巾にして踊ります。

太鼓打ち：**重い太鼓を打ち続け、踊りのリズムをとります**。手に持つ締太鼓は重く、踊ることは苦行ともいえ、かつては婿入りした者にこの役をあてたといいます。紋付きの袷の着流しで、腰に白布を縒って巻いて端を左右に下げ、白足袋を履きます。鍔に白布を付けた脇差を差して踊ります。

楽器と用具



ささら：早乙女とともに農作業に携わります。**苗を田に投げ入れる役**とも言い、小学生の子供が演じました。紺色の絣（かすり）の着物を着流して黒帯を締め、白足袋を履き踊ります。

種下ろし：穀霊（こくれい）を降ろす役。演目ごとに**口上を述べ、その後、歌を歌います**。南津島では、二mあまりの金・銀紙の梵天（ぼんてん）を持っています。歌のうまい声のよく通る人が選ばれました。黒色の紋付羽織・袴（はかま）に白足袋を履き、小刀を差し踊ります。

笛：二人で息を合わせて演奏し、太夫とともに**踊りの始まりと終わりのけじめをつけます**。種まきでは、メロディーを吹きます。紺色の羽織・袴を着用して演じます。

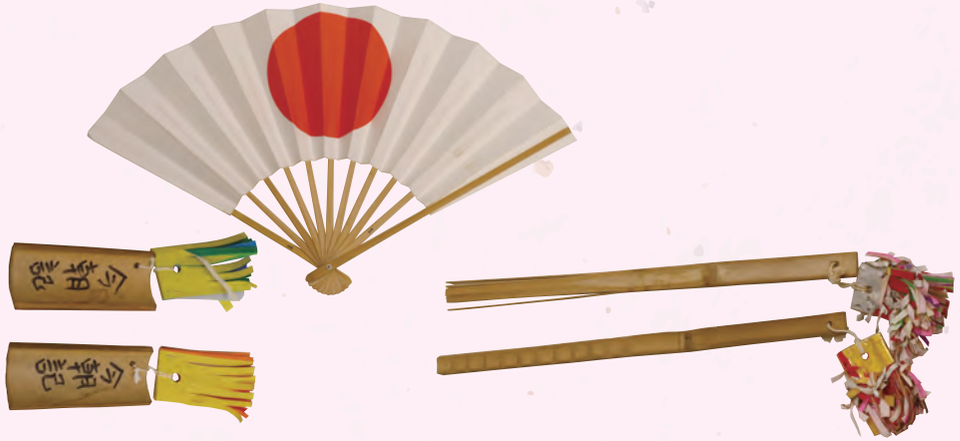
社壇（しゃだん）・桶太鼓：氏神である八幡神社の神札が祀（まつ）られています。上部には神楽（獅子頭）を飾り、側面には桶太鼓を置きます。太夫は社壇の前にいて、口上を述べます。普段は道具が収納されており、竿を挿して家から家へ持ち運びました。

ふくべ：鍬頭が振り回して調子を取る道具。竹で一升瓶のような形に編んで成形し、色紙を貼って作ります。中には、鈴や豆が入れてあり、カラカラと音が鳴ります。持ち手部分は桑の木でできており、操作しやすい使い込まれた持ち手になっています。

笛：七穴六本調子の笛を用います。太夫の口上と合わせ笛を吹く演奏は、「ぶっきり」と呼ばれます。水で笛を湿らせてから使用していますが、地区内を回って歩いた当時は、振る舞われた酒を使っていたそうです。

締太鼓：太鼓打ちが演技中、ずっと持ち続ける太鼓。現在用いているものは、約五kgのもので、この重さでも、軽くなったといわれるほど。太鼓打ちの役が婿いじめと言われてきたのも納得の重量です。

梵天：種下ろしが持ちます。金・銀紙を刻んで幣束をつくり、長さ一・七mほどの竹に挿して演じます。正式名称は「五色の五つ下がりのぼんてん」というそうです。



ささら：「親」と「子」の竹を擦り付けて音を出す楽器でもあり、また、さまざまな農作業を表現する小道具にもなります。長さ三三～三八cmぐらいの竹を用い、「親」のすり棒（下）は十五カ所程度の刻みが入ります。「子」のささら（上）は、端から二〇cmを縦に細長く割いて使います。

四つ竹・扇：長さ一〇cmほどの丸竹を二つに割り、端に五色の飾りを付けています。煤竹を利用して作ります。早乙女たちが掌に包んで持ち、カスタネットのように打ちつけて音を出します。白扇も早乙女たちが用います。上がりの演目でのみ使われ、箕に見立てて籾殻をとばすようにあおって用います。

東北地方と田植踊

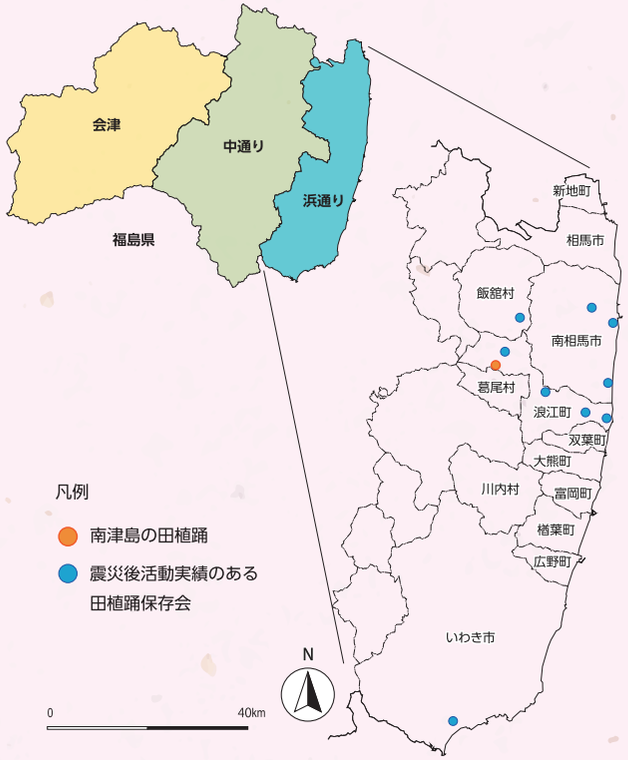
田植踊は、五穀豊穣・家内安全を願って正月に行われる民俗芸能です。冷害に苦しんだ**東北地方特有の芸能**であり、青森・秋田を除く、東北四県に分布しています。二〇〇一年に発表された論文によると、「福島県一四〇、岩手県九七、山形県四四、宮城県二六の三〇七」の芸能団体が活動していました[千葉、二〇〇一、五二]。

田植踊の半数近くが伝承された福島県のうち、津島地区のある浜通り北部地域は、とくに盛んに行なわれてきた地域でした。約七〇ヶ所に伝承され、津島地区に限っても、南津島のほか上津島・下津島・赤宇木（あこうぎ）の計・四地区に田植踊がありました。津島四地区の田植踊は、「津島の田植踊」として、福島県重要無形民俗文化財、国の選択無形民俗文化財に指定される優れた芸能です。

こうした状況が大きく変化したのは、二〇一一年三月一一日の東日本大震災でした。浜通り北部は、東日本大震災および福島第一原子力発電所事故により、大きな被害を受けることとなりました。その結果、震災前に七〇あまりあった芸能団体のうち、活動を**再開したものは、二割にも満たない**状況が続いています。継続的に活動している団体はさらに少なくなります。

南津島の田植踊は、震災後も活動が継続する数少ない事例のひとつなのです。

■震災後の田植踊の状況

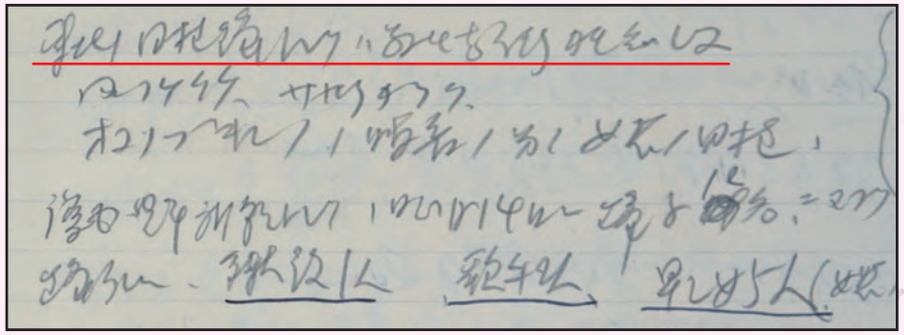


民俗芸能を継承するふくしま会の調査をもとに作成

山口弥一郎ノート

「津島の田植踊」は、地域内で伝承され、外に出ることはありませんでした。まさに地元だけで演じられる、郷土芸能と言ってよいものでした。こうした「津島の田植踊」が広く認知され、文化財指定を受けるまでには、民俗学者による学術調査がありました。その中心となったのは、福島県会津美里町新鶴地区出身の山口弥一郎氏による調査でした。ここでは昭和三〇年代に実施された学術調査の様子を、彼の残したノートをもとにのぞいてみましょう。

昭和三四（一九五九）年一一月二八日、山口は、初めて南津島の田植踊を実見しました。そこには、この田植踊を目にした感動が書き込まれています。踊りの詳細を記したノートには、**「東北ノ田植踊トシテハ最モ古例カモシレヌ」**（次頁の写真参照）と書き込まれています。つまり彼は、東北地方に数ある田植踊のなかで、いま自分が目にしている南津島の田植踊が最も古い姿を残すものではないか――。そう感じるほどの衝撃を受けたのでした。



山口弥一郎ノート（山口弥一郎旧蔵資料 I-0113）磐梯町所蔵

というのも、各地の田植踊が、魅せる芸能として華やかになっていったのに対し、南津島の田植踊は、「しんみりした古い念仏踊にみられるような、**敬虔（けいけん）さ、静寂（せいじゃく）な趣（おもむき）」を残していた**からです。

山口が、南津島の田植踊に出会ったのは、第九回福島県郷土芸能大会でした。じつはこのとき、初めて田植踊が津島地区の外で演じられたのだと言います。偶然とも言える出会いを経て、翌一九六〇年から本格的な調査が行なわれることになりました。この調査には、山口のほかにも民俗芸能研究者として著名な本田安次氏らが参加しました。これがのちに、文化財指定を受ける基礎となる調査でした。

神楽七芸

——民俗芸能の宝庫——そう呼ばれてきた津島地区には、田植踊のほかにも多数の芸能が伝承されてきました。そのなかでも田植踊と一緒に行なわれる神楽は有名です。南津島には、**神楽七芸という七種類の演目**がありました。①神楽舞（長獅子）、②岡崎（ひょっとこ）、③羅漢舞（らかんまい）、④亀山仇討（かめやまかたきうち）、⑤和唐内（わとうない）（和藤内）、⑥毛唐人（けとうじん）、⑦鳥刺（とりさし）の七つを指します。⑦鳥刺は、残念ながら伝承が途絶えており、そのほかの六つの演目が、震災前まで伝わってきました。

小正月に行なわれる田植踊は、庭元（にわもと）での奉納が済むと、依頼を受けた各家を回って、招待舞が行なわれました。このとき田植踊に続き、①神楽舞（長獅子）もあわせて奉納されてきました。招待された家に、多くの観客が集まっている時や、〝お花〟（ご祝儀）を多く出してくださった家では、特別に、②岡崎（ひょっとこ）も披露していました。

七芸のうち、①②が外に披露することを目的とした芸であったのに対し、③から⑥の演目は、舞い手たちが楽しむ、いわば内向きの芸でした。というのも、これらの演目は、庭元で限られた人たちに向けて披露されてきました。田植踊の笠ぬきが終わり、その年の田植踊の奉納が済んだあと、舞い手たちは庭元宅で直会（なおらい）をします。お酒を酌み交わしながら、場があたたまってくると、③羅漢舞、④亀山仇討、⑤和唐内、⑥毛唐人の演目が、連日踊ってきた疲れを吹き飛ばすかのように、面白おかしく演じられました。

⑤和唐内（和藤内）を演じる　三瓶章陸氏提供

和唐内に続いて演じられる⑥毛唐人　三瓶章陸氏提供

震災後の取り組み

原発事故により、津島地区は帰還困難区域に指定されました。地元に住むことができなくなってしまったなかで、震災後は、**①神楽の復活、②田植踊の復活、③学生たちの協力**というように、芸能の再開と継承が進んできました。

非常事態に直面したなか、保存会の三瓶専次郎会長は、二〇一一年八月から、仲間たちに連絡をとりはじめたそうです。一人ひとり状況を確認し、参加・協力の声がけをすすめました。まずは、少ない人数で演じられる、神楽の練習に取り組みました。そして、二〇一三年九月の「ふるさとの祭り」で神楽が復活しました。

保存会の活動は再開しましたが、踊り手だけでも十五名が必要となる、田植踊の再開は困難を極めました。再開のきっかけは、二〇一八年一月の記録映像の作成でした。「〔この機会が〕最初で最後かもしれないと言って人集めしているんだ」〔三瓶二〇一九〕と当時の様子を、専次郎会長は語っています。やっとのことで踊り手を確保しました。このとき初めて女性が参加し、田植踊が演じられました。

二〇二二年八月から、保存会と東北学院大学文学部歴史学科の学生との交流が始まりました。これまでも浪江高等学校津島校（旧小高（おだか）農業高等学校津島校）の学生が、田植踊の練習をしたことがありました。ただ、地域外からの助っ人参加はこれが初めてのことです。

いま日本では、「民俗芸能とはそれが伝承される地域の住民によって演じられるという暗黙の了解を…アップデートする時期」〔松岡　二〇二二〕にきていると言われています。保存会と東北学院大生の新たな取り組みも、こうした状況に何とか対応しようとするひとつの試みと言えるかもしれません。新たな取り組みは多くの方に支えられ、つづけられています。

南津島郷土芸術保存会と東北学院大学の学生たち

参考文献

石丸裕子ほか、一九八〇、「芸能」『津島の民俗』早稲田大学日本民俗学研究会

懸田弘訓、一九七六、「田植踊りの伝承と変遷の一形態」本田安次博士古稀記念会編『藝能論纂』錦正社

――、二〇〇五、「津島の田植踊り」『民俗芸能』（八六）

菊地和博、二〇一七、『東北の民俗芸能と祭礼行事』清文堂出版

三瓶専次郎、二〇一九、「南津島の神楽・神楽七芸・田植踊り」菊池和子編『福島　芸能の灯消さず』遊行社

三瓶陸、二〇〇〇、「津島の田植踊り」星亮一編『わが郷土なみえ』ヨークベニマル

千葉雄市、二〇〇一、「宮城県の民俗芸能（二）」『東北歴史博物館研究紀要』（二）

本田安次、一九九五（一九六七）、「南津島・赤宇木の豊年田植手踊」『本田安次著作集　日本の伝統芸能　第八巻　田楽Ⅰ』錦正社

松岡薫、二〇二二、「持続可能な民俗芸能の継承にむけて―担い手の視点から」『日本民俗学』（三二二）

山口弥一郎、一九七三（一九五九）、「郷土芸能楽器・ささら談義」『山口弥一郎選集　第十巻福島県の民俗芸能』世界文庫

――、一九七三、「双葉郡浪江町津島の田植踊り」『山口弥一郎選集　第十巻　福島県の民俗芸能』世界文庫

製作：東北学院大学金子研究室四期生一同

みんなの鑑賞ガイド：大河原渉・太田代樹・大槻丈弥・國崎大輝・白岩大空・但野就斗

もっと田植踊！：飯間琳・小原智奈・佐久間奈帆・佐澤春花・髙橋ひより

デザイン：小川晶・鈴木碧優・松浦那奈

イラスト製作：兼子千潤・今野実永

協力・資料提供：南津島郷土芸術保存会・三瓶専次郎・紺野宏・三瓶章陸・三瓶友一・磐梯町（福島県）

写真撮影：庄司貴俊・増藤雄大

監修：金子祥之

南津島の田植踊を実際にみてみよう！

編集・発行：東北学院大学博物館

発行日：二〇二四年十二月十五日

〒九八〇-八五一一宮城県仙台市青葉区土樋一丁目三-一

電話：〇二二-二六四-六九二〇

https://www.ipc.tohoku-gakuin.ac.jp/tgum/

@tgu_museum

https://www.ipc.tohoku-gakuin.ac.jp/tgum/